

シンポジウム要旨



曽我泉美 (そが いずみ)
(有)いまあじゅ 代表取締役
転校の多い小学校時代を送る。
東京の短大卒業後、いわきにU
ターン。FMいわき開局時には、
プロデューサーとして携わる。
現在は、「朝日サリー」発行のほか、
幻冬舎や昭文社「マップル」の
取材、子育て情報誌「元気なマ
マの応援本」なども手掛け、幅
広く活躍。

ネットは自由区

本と書くことが好きな学生時代を送り、就職時、マスコミを志願しました。しかし、新聞社は入社試験さえも女性は一切お断りの時代でした。

23歳で友人と2人で、A4片観音サイズの新聞「サリー」を立ち上げ、その後朝日新聞販売店で発行していた「いわき朝日」と合併し「朝日サリー」になりました。創刊当初は若く経験も少ないということで相手にしてもらえず、営業に苦戦しました。20年経った現在は東京の出版社の仕事もしています。

今後力を入れていきたいと思うのは、インターネットを利用した仕事です。オンラインショップの世界では、老若男女の区別や会社の規模も関係ありません。発想ひとつですばらしい商品が生まれます。皆さんも、インターネットを活用し、次のステップに生かしてみませんか。



佐藤 修 (さとう おさむ)
保健師
農業短期大学を経て、看護学校にて看護師の資格を取得。福島県立総合衛生学院保健学科で保健師の資格を取得。県内では初の男性の保健師となる。現在いわき市にて赤ちゃんの発育・発達や大人の生活習慣病予防、高齢者の介護予防等に関する仕事をしている。

子育て応援社会へ

看護学校の実習を通して、病気を予防できる仕事がしたいと思い、保健師となり9年目になりました。初めは男性保健師として珍しがられましたが、今は違います。

現在は、健康問題で地域の人々と関って働いていますが、健康に関する講話や相談時間を設けても男性はあまり来ないのが残念です。

しかし、乳児健診などでは若い父親が多く見られ、男女が協力して子育てをしていると感じます。子育ての基盤として社会全体を変えていく取り組みをすれば、もっと男性の意識は変わってくると思います。

仕事に男女の区別はないのですが、考え方の違いはあると思うので、これから男性の視点を発揮してみたいと考えています。



佐藤江利子 (さとう えりこ)
一級和裁士・一級着付士

東京の和裁学校で修行を積み、いわきで和裁士として仕事を始める。仕事の傍ら、舞台・芸能衣裳や美術館のグリム童話展のぬいぐるみ、飛び出す絵本など制作。沼ノ内地区の獅子舞を描いた「ししまいのなつ」は、第1回「ふくしま絵本賞」大賞受賞。

出会いから思わぬ力が

男性の場合は「プロの職人」とされる和裁士の世界で、手に職をつけようと、東京で5年間修行しました。そこで得た一級の資格が一番上で、すべての着物を縫え、自分で着たり、着せられたり出来るというものです。

いわきに戻り、どんな仕立ても懸命にやってきましたが、若い女性であるせいか、あまり大きな仕事は任せてもらえないとも感じました。そんな中、人との出会いにより縁が生まれ、アロハ生地やオオカミの実物大ぬいぐるみ、飛び出す絵本など色々作りました。頼まれると、「絶対やるぞ」と思わぬ力が出る感じなのです。

和裁で培った技術が基本にあり、何か一生懸命やると思えば、次も頑張れるのではないかと思います。

人生の化学変化

加藤：3人のお話を聞いて、感心しました。訓練・鍛錬を経て好きなことにたどり着き、自分の好きなことをやって、人に喜ばれ、なおかつ収入がある。こういう人たちこそ、地域に活力を与える公共財だといえますし、大事にしていかなければならないと思います。

ずっと自分がやってきたことを基礎に化学変化させ、好きなことにつなげることににより、これからの人生が楽しくなるのではないのでしょうか。

後藤：戦後日本は経済成長一辺倒で前へ前へと進んできました。ところが05年国勢調査によれば、夫婦と子どももからなる標準世帯を、一人暮らしの単独世帯が上回る時代を迎えています。新しい生き方・家族・地域づくりが求められています。本日のパネリストたちは、新しいあり方への一歩を開拓した“チャレンジャー”ですね。21世紀のいわきづくりに、会場の皆さんと御一緒にチャレンジしていきたいですね。



コーディネーター
後藤宣代 (ごとう のぶよ)

福島県立医科大学・東日本国際大学 非常勤講師

東京大学大学院 経済学研究科 博士課程単位取得。福島県男女共生センター調査研究室 専門研究員などを歴任。NPO法人「 commons 」理事。

アンケートより いつでもスタートなんです！/現在の共有だけでなく、未来の共有ができるのは素晴らしいことだと思います。/素晴らしい講演でしたが、もっと時間をかけてほしい。/パネリストのチャレンジ精神に驚いた。/見習いたいことがたくさんありました。/もっと多くの男性に聴いてもらうのが今後の課題でしょう。